

同志社大学

2013年度 個人研究費研究経過・成果報告書

2014年 3月 29日提出

所 属	職 名	氏 名
経済学部	教 授	竹 廣 良 司
研 究 題 目	企業組織と多角的事業展開	
研 究 成 果 の 概 要	<p>本年度は課題テーマに対して日経財務データ等の企業データを用い、実証分析を行うことを目的として研究を行った。企業がどのような組織編成を行うかにより、資金の流れやガバナンスに変化が生じ、これらは効率性に影響を与えると考えられる。一方、企業の多角的事業展開は産業シフトやシナジー効果の利用といった意味において企業の戦略的な経営にとって重要であるが、こうした戦略は企業のガバナンスやファイナンスのありようによっても異なると考えられ、これらについての相互関係を考えることが有効である。また、企業グループに属する個々の企業（グループ企業）の多角的事業戦略を含めた諸行動が企業規模やガバナンスの違いによりどのような影響を受けるのかについても分析を進めた。</p> <p>本年度の一連の研究成果は論文「企業グループにおける企業間関係が利益率に与える影響」として『経済学論叢（同志社大学）』第65巻第4号（2013年3月）にまとめられている。論文では企業グループの連携が30年ほどの間にどのように変化したか、また企業グループのあり様が企業の利益率にどのように影響を与えるかを、パネルデータを用いて分析を行っている。</p> <p>財務データによる記述統計量を基にした分析では、製造業でも非製造業でも連結子会社数がより増加傾向を示しており、形式的にはグループ経営が進行している状況を明らかにできた。また、関係会社との取引については製造業において、よりウェイトが高くなっていることが分かった。財務データによるパネル分析では、製造業においては企業グループを積極的に維持することが利益率を低めてきた可能性が明らかとなったが、一方でリーマンショック以降、グループ経営のあり様に変化していることを示唆する結果が得られた。非製造業ではむしろ関係会社との取引に力点を置く方が利益率を高める結果となっているが、製造業同様、リーマンショック以降、利益率の決定要因に変化が生じていると考えられる推定結果となった。</p>	